

## 総合的な学習 LIFE の構想

### 1. 「総合的な学習」をどう捉えるか

#### a 「総合的な学習」の時間に求められるもの

学校教育について、学校で教え学ばれる知識が、子どもたちにとって価値あるものと感じられず、何のためにそれを学ばなければならないのか、明確な理由が見いだせない、感じられないという批判がある。時代の変化に伴って、教科別に区切られた学習内容は現実の生活と遊離しているという批判もある。

「総合的な学習」では、知識を与えるだけではなく、これまでの教科学習以上に**体験的な学習**を中心に構成し、子どもたちが**主体的、意欲的**に取り組むことが期待されている。また、子どもの学びたい知りたいという欲求や自己を確立しようとする欲求に応え、「知識を受動的に与えられてきた学習」から「新しい知識を**能動的**に見つけだし、自分なりに発信する学習」へと転換を図ることを目指している。

将来にわたって、自分なりの問いを持って能動的に学習活動を繰り返し、自分が納得できる**自分なりの知の体系**を構成していくことのできる生徒を育てる、そのために「総合的な学習」が1つの足がかりとなるように考えていきたい。

#### b 当校のこれまでの実践に基づいて

当校では以前から自己学習力の育成や学びの拡がりを視野においた多様な学習活動を展開してきた。それは、生徒の選択による課題探究学習、実験実習を多く取り入れた体験的な学習、実際に現地に出かけての野外学習、自然観察、環境学習、社会見学といった内容であるが、学びを拡げ、教科の枠を越えて学びのつながりを求める学習であった。

当校における「総合的な学習」は、これまでに積み上げてきた教育実践に基づき、新学習指導要領に示された「総合的な学習」の趣旨を盛り込みながら、再編・再構築をする事を基本とした。3年生の社会見学旅行や5年生の修学旅行などの学校行事との連携も視野に入れ、**中高6カ年一貫のコンセプト**のもとに構築するものである（具体的には2-dで詳述する）。

課題の発見・探究といった**自ら学び自ら考える「問題解決能力」**の育成や、「**自己の生き方**」についての**自覚を深める**ためのカリキュラムを具体的に実現するためには、子どもたちの学習活動において、それらが発揮・活用される場面や仕組みをいかに作っていくのかがポイントとなる。そのためテーマ選びと単元構成が「総合的な学習」の成否を握っていると考えられる。たとえば「自分で問題を発見」して「解決を目指して取り組む」ためには、テーマとなる事項を調べ、まとめた上で、その知識を基に判断し、「疑問」を抱くことが出発点となる。そのためのテーマとしては、結果が分かりきった内容では興味関心は高まらず、生徒が自ら進んで活動することは望めない。表面的な扱いでは不十分であり、**深い掘り下げが必要になる場合もある**と考えられる。「総合的な学習」のカリキュラムの構築に当たっては、各教科の学習が基盤となり、各教科で培った力のネットワーク化をはかる「**横断的・総合的**」内容であると同時に、**高い専門性を追求する学習**となることを目指すべきであると考えた。

### 2. 「総合的な学習」LIFE

#### a 当校の新教育課程に関する状況

1999年度、中学校の教育課程表の決定にともない、「総合的な学習」を1学年から3学年まで、**各学年で週2時間**とすることが決定した。また高等学校については、新教育課程の検討が終わっていないため、時間数や各学年にどのように配分するかは未定であるが、**4学年は週2時間、5学年は週1時間**とする予定である。

これまでの実践事例を見ると「総合的な学習」に選択制を取り入れている学校が多く見られる。しかし、当校の「総合的な学習」の時間では、探究活動やテーマ設定においては生徒の個性や興味・関心に基づいて自由な設定が行えるものとするが、教育課程としては全生徒が同一の授業を必修で履修するものとし、**選択制はとらない**ものとした。中学校の新教育課程においては、従来以上に選択教科の枠が拡大されている。生徒の個性や興味・関心、あるいは**将来の進路**を見通して選択を行い、授業を受けることが可能となっている。そうした中で「総合的な学習」の選択制の是非を考えたとき、単に子どもの興味・関心や経験を中心として体験的な活動を組織した

のでは、ただむやみに動き回るだけの無意味な活動を生み出すだけで、苦勞の多い割に「総合的な学習」で育もうとする力をつけることができない危険性があると考えた。「総合的な学習」では、**育もうとする力を見据えて、教師の目で見通しを持ってテーマや課題を設定し、確実な力をつけさせたい**と考えた。

#### b 当校の「総合的な学習」のカリキュラム開発の視点

上に述べてきたような分析をもとに構築してきた当校の「総合的な学習」のカリキュラムは、情報化社会の中での「学び方」の学習を出発点として、自分と自然や社会とのかかわりについての理解、人間や人間の文化についての理解を目指した、中・高六カ年一貫の学習プログラムである。特に以下のような視点を盛り込んだカリキュラムの開発を行っている。

1. 生徒の発達段階に応じ、**学び方やものの考え方**を基礎として、**問題解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度の育成**を図るとともに、**特に高等学校においては自己の生き方についての自覚を深める**ことに重点を置いたカリキュラムとなること。
2. 各教科等で身につけられた知識や技能などが相互に関連づけられ、深められ、生徒の中で総合的に働くようにすると同時に、必要に応じて**高い専門性を追求する**内容を盛り込むこと。
3. 課題の発見・探究、情報分析、問題の解決、まとめと発表・自己表現、コミュニケーション、自己評価といった、「総合的な学習」の**学びの意味**に視点を置いたテーマや単元を開発すること。
4. 「総合的な学習」においての育みたい能力とそれぞれの学年レベルに対応した学習目標を明確化し、**中学校・高等学校6カ年の系統性**を考慮したカリキュラムとなること。

また、これまでの検討結果を踏まえて、当校における「総合的な学習」を「LIFE (Learning, Identity, Feelings, Ecology)」と命名した。各学年のテーマは次の表1に示す。

表1 各学年のテーマ

第1学年	学び方を学ぶ 「情報処理能力と自己表現能力の育成をめざして」
第2学年	環境と人間の生き方を学ぶ 「自然と人間、人間と人間の共生をめざして」
第3学年	自己の生きる地域と世界について学ぶ 「地域からの世界理解、世界からの地域理解をめざして」
第4学年	人間と人間の文化について学ぶ 「人間の文化や人間についての科学的な理解をめざして」
第5学年	言語の違いを越えて世界を学ぶ 「国際理解や国際協力の深化をめざして」

#### c 教育課程上の位置づけ

「総合的な学習」の本来のねらいは、子どもの興味・関心や経験を組織することを主軸にしながら、あわせて教科学習の知識・経験を、子ども自らの課題追求の道筋や論理の中に、新たな意味や関係を持つものとして組織していこうとしていると考えられる。そこで、当校における「総合的な学習」の教育課程における位置づけを、次のように考えた。

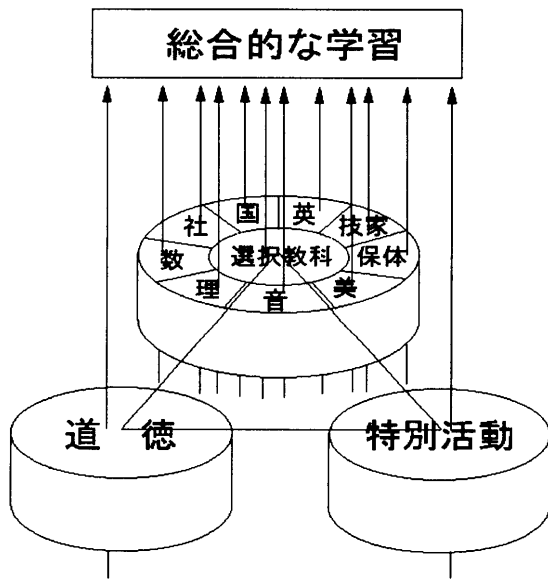


図1 「総合的な学習」の位置づけの概念

1. 「総合的な学習」の内容は、教科の領域に基盤をおきながら、特別活動や道徳の内容を包括的に取り込んでいくものにする。
2. 「総合的な学習」の学習形態には、コース制や選択制は取り入れない。授業の中で学習内容を選んで活動する場面を設ける。
3. 「総合的な学習」のカリキュラムは、中・高六カ年一貫をコンセプトの1つにして、編成するものとする。

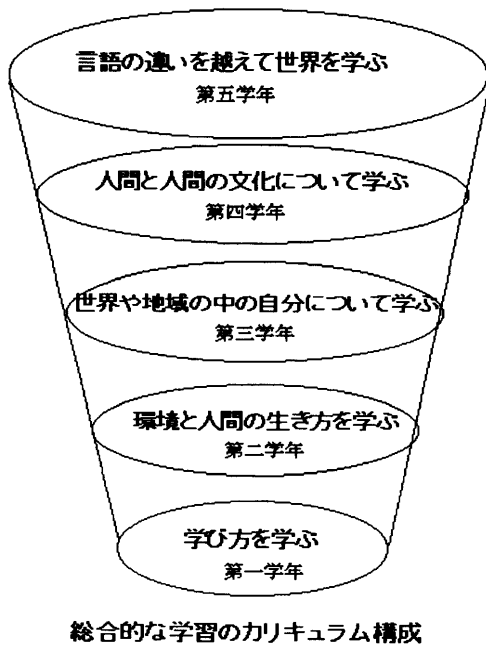


図2 「総合的な学習」LIFEのカリキュラム構成

構造としては、図2に示すように、第1学年での学習を基礎に第2学年における活動を積み上げ、**学年進行とともに深化した内容**を目指している。

選択制を導入しなかったこととあわせて、第1学年から第5学年まで段階を追って積み上げていく構造としたことも、当校の「総合的な学習」LIFEの特徴といえる。これは、各学年ごとのねらい・目標を確実に力としてつけることを期待し、単に何か活動をして「おもしろかった」で終わらせないことを意識したものである。現在の段階で評価についての十分な検討は行っていないのが現状であるが、教師がねらい（育ち）が実現しつつあるという見通しを持って指導していくためにも、生徒にどのような育ちを実現しようとしたのかの目標の確認とそれがどの程度達成できたかを判断するための形成的評価の工夫が必要となると考えている。

#### d 「総合的な学習」LIFEのねらい

高等学校学習指導要領では、「総合的な学習」のねらいを次のように示している。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

当校の「総合的な学習」LIFEにおいて特に意識した点は、「自ら課題を見付け、主体的創造的に取り組む」という点である。「教科学習」にはそれぞれの教科ごとに知の体系がある。「総合的な学習」LIFEでは生徒が「自分なりの知の体系」を作っていくという姿勢が求められている。これを実現するためには、どのような課題を与えても達成できるというものではない。このねらいに即した課題を提供し、生徒の視点で活動が行えるように配慮することが必要である。

また、「教科学習」では、間違いを排除し正しいらしいものを追求していく姿勢が求められることが多い。「総合的な学習」LIFEでは生徒の創造性を伸ばすために、アイデアや発想を大切にし、生徒の目による新しい着眼点で思考できるような課題を与えるように意識している。

これまで当校で実践してきた中学校における「課題学習」では、情報や環境、地域文化などをテーマに生徒の主体的な活動を育むことを目指して成果を上げてきた。たとえば2年生で行われてきた「環境」をテーマにした課題学習では、酸性雨の観測を中心に据えてインターネットを活用して共同観測を行い、その体験をもとに大気汚染などの環境問題について課題研究、探究活動に取り組んできた。また環境問題を学習する他校の生徒との交流をはかり、環境について共に考え行動する生徒を育てる取り組みを行ってきた。1年から3年までの「総合的な学習」LIFEの内容は、これら実践を積み重ねてきた「主体性・創造性を育む活動」の実績をもとに発展させたり、新たな内容を付加して構築したものである。

一方、高等学校における「総合的な学習」LIFEでは、「自己の在り方生き方を考える」ことに重点を置く。一定の方法に即して体系的に理論化された科学や学問の成果としての「**学問知**」に対し、「**非学問知**」としての**美的な感性、宗教的背景に基づく価値観**等に焦点を当て、それを人間と文化という関係として生徒の成長の中に位置づけることを試みている。こうしたことを意図した第4学年（高等学校1年）の「人間と人間の文化について学ぶ」は、これまでの「総合的な学習」の**先進的な実践の中には例を見ることのできない**、当校の「総合的な学習」LIFEを特徴づける内容となる。第5学年（高等学校2年）の「言語の違いを越えて世界を学ぶ」は、ただ単に国際交流をすることが目的ではなく、交流相手の文化を肌で感じる重要な視点となる。こうした目的の国際交流の場では英語を自在に操ることなしには目的は達成できないと考え、できるだけ英語の学習が進んだ高学年で実施することが望ましいと判断した。

次の表2に各学年におけるねらいを、①「問題解決能力の育成」に関わるねらいと、②「自己の生き方についての自覚を深める」に関わるねらいにわけて示した。学年進行とともに、前者から後者へと重点が移行していることが特徴である。

教育課程における位置づけは第5学年までであるが、最終学年となる第6学年（高校3年）では、それまでの「総合的な学習」LIFEにおける学びを生かし、**自らの進路について自己形成や人間としてのあり方を見つめながら主体的に判断して未来を切り拓いていく態度**を求め、そこに「総合的な学習」LIFEの成果が結実するものと期待している。

表2 「総合的な学習」LIFE 各学年のねらい

	①「問題解決能力の育成」に関わるねらい		②「自己の生き方についての自覚を深める」に関わるねらい	
1年	自己学習力の基盤となる「学ぶ方法」を学び、「探究的な態度」を育む	コンピュータを表現や情報収集、分析などの道具として活用できる情報リテラシーを育成する。		
2年	「環境と人間の生き方」についての学習を進める中から、「生きる力としての問題解決能力」に焦点を当て、「問題意識をきちんと持つことができる生徒」を育成する。		自分の生活を見つめ、自らの判断を基に活動を計画し、自分の健康を守るための行動や地球環境の中でよりよく生きる姿勢について考えさせる。	
3年	「地域」や「世界」の問題に関する情報を収集・整理・分析する能力を育て、自らそれらの問題の解決や探求ができるようにする。	「地域」や「世界」の問題に関するものの見方や考え方を習得し、それを使ってそれらの問題について説明できるようにする。	「地域」や「世界」の形成や発展を担うべき主体としての自覚を深め、それらの問題に関心を持ち、それらの問題の解決や探求の活動に主体的に、創造的に取り組む態度を育てる。	
4年	文化が生まれ出された社会の価値観をもとにその文化を理解しようとする態度を育て、様々な文化に対する理解力を育む。		文化に対する理解の仕方を身につけるとともに様々な文化に対する理解を深め、自分のもつ価値観だけでなく、その文化が生まれ出された社会の価値観で理解したり、共感したりすることができる態度を育む。	
5年	これまで「総合的な学習の時間」で育んできた能力を活かし、さらに収集した情報を目標に応じて選択したり、統合する技能を高める。		英語を使って世界の人々とコミュニケーションをはかり、自分の価値観を揺さぶるような異文化との交流体験を持たせる。	学習の最終段階においては、単なる二国(二つの文化)間の問題に意識が留まることなく、今日の地球的課題〔環境・人口・食料・貿易・地域紛争等の問題〕へも交流の内容が展開していくことを想定し、そのような問題の原因と、その解決へお互いがどのように貢献できるかを意識できるように交流を援助する。

e 「総合的な学習」LIFEで育む能力

今年度当校で作成した生徒向けの「総合的な学習ワークブック」の中で、「総合的な学習」LIFEについて次のように解説している。

「総合的な学習」とは、2002年から全国の各学校で実施されることになった、新しい形の学習の時間です。広島大学附属福山中・高等学校では、他の学校に先駆けて「総合的な学習」の時間を1999年度から実施しています。

ところで、みなさんは「知識」と「知恵」の違いについて考えてみたことがあるでしょうか。

これまでみなさんが学校で受けてきた授業では、いろいろな「知識」を習得してきたことでしょう。漢字や九九を覚えたり、楽器を演奏したり、料理を作ったり。でも、それらの中にはどうしてそのことを勉強しなければいけないのか疑問に思ったことがあるかもしれません。電気に関する法則を知らなくても、テレビはスイッチを入れれば見えるし、何も困ることはないでしょう。

昔は困ったこと、自分で解決ができないことが起こると、長老に「知恵」をかりるといふならわしがありました。ここで、「知識」をかりるとは言わないですね。たくさんの「知識」を持っているだけではなく、その知識をどのように活用したら物事を解決できるか、上手に知識を利用する方法も含めた「知恵」を持っている人が長老として尊敬されていたのでしょう。

もちろんみなさんはこれまでの授業でも「知識」だけではなく「知恵」を身につけてきたと思いますが、「総合的な学習」では、これまでの授業以上に、身につけた「知識」をいかに活用するかという点に重点を置いています。

当校の「総合的な学習」LIFEは、各教科の学習やLIFEⅠ（中学1年）における学び方の基本を基盤として、LIFEⅡ（中学2年）の「環境や健康」、LIFEⅢ（中学3年）の「地域や世界」についての「横断的・総合的」内容のテーマや課題を与える中で生徒に「知識」を生かす機会を与え、実際に「知識」を活用する場面を作り出すことで、各教科で培った力の「**知のネットワーク化**」をはかっている。

高等学校ではさらに、LIFEⅣ（高校1年）の「人間と文化」やLIFEⅤ（高校2年）の「国際交流」をテーマに活動する中から、社会と自分との関わりの中でいかに「知識」を活用するかを主体的に考えさせる実践を通して、**自己をよりよく生かす「知恵」**を身につけさせようとしている。

「総合的な学習」LIFEでは各学年、単元ごとに様々な能力を育成していく。そうした能力が調和的に働き、生活の中で生かされるためには、実際の体験や経験が、それも成就感を伴う経験を積ませることが望ましい。「総合的な学習」LIFEのカリキュラムは、自己評価や相互評価も取り入れながら、いかに成就感や達成感を感じさせていくかということを中心に大きなポイントとして、構成の検討がされてきた。

別紙1は、各学年の活動の概要と、目的・ねらい、育もうとする能力、LIFE全体における位置づけをまとめたものである。「総合的な学習」で育もうとする能力とは、この表に示した「育もうとする能力」が単一的に働くだけでは満足できない。学びの基礎基本となる能力から始まり、自己の生き方に関わる判断を伴うような能力まで、様々なレベルの能力が有機的に結合し働くことができるような生徒の姿こそが、求められていると考える。

各学年ごとに、様々な課題を通して学ぶ中から育まれていく能力が、学年進行とともに図2に示した積み上げていく構造の中で深化し、さらに新たな能力を加え発展していくことで、「総合的な学習」で育むことを期待される力が身に付くものと考えられる。

「総合的な学習」LIFEで身につけた力が、生徒の生活や教科学習にもフィードバックされ、有効に働くことを期待している。

#### f 中学校・高等学校6カ年のカリキュラム

各学年の具体的なカリキュラムおよび学習のねらい・目標については次項に掲載している。